

# '84年を聞いてぬいて

# 各支部の副支部長さんにきく

## その1

# 日刊 勤労千葉

84. 12. 19

No. 1821

### 国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）  
（鉄電）二九三五（六・公衆）〇四七二（二二）七二〇七

中曽根の「戦後政治の総決算」をかけた反動攻撃が、「三里塚」と「国鉄」に照準を合わせ吹き荒れた一年間だった。

そして新たな年、一九八五年はより激しく、より強い嵐が襲いかかろうとしている。三里塚二期着工にむけた反対同盟Ⅱ三里塚闘争解体攻撃の凶暴さを見よ。首切り「三本柱」、「60・3ダイ改」合理化攻撃のすさまじさを見よ。これらは侵略戦争動員態勢づくりにむけ、人民のたたかう砦「三里塚」と、日本労働運動の拠点「国鉄」をぶつつぶす攻撃である。

勤労千葉は「三里塚を基軸に中曽根と対決する労働運動」路線のもと、3・25、10・10五割動員を全力で貫徹し、国鉄当局、動労「本部」革マル一体となった「勤乗動」「三本柱」攻撃と対決し闘いぬいてきた。

「分割・民営化」と10ノ15万人首切り攻撃の突破口である「60・3ダイ改」に直面した今、三里塚二期阻止の闘いと結合させ、怒りの総決起を実現する決意を明らかにするものである。

本紙は、一年間の闘いを各支部の最先頭で闘いぬいた副支部長の感想文を紹介する。

## 職場抵抗闘争を充実させよう

勝浦支部 照岡清一

中曽根内閣の政治路線をなす臨調行革、とりわけその目玉としての国鉄攻撃は、ヤミ・カラ・ブラキャンペーンからはじまり「59・2拠点間直行輸送体系」とする貨物輸送全廃

攻撃による要員合理化、これに伴う余剰人員調整策と称する首切り「三本柱」等、効率化、要員合理化を優先させ、運転保安無視の合理化計画は一線で働く動力車乗務員の生命を奪うまでに至っております。

そのあらわれが、外房線・細代踏切で起こった平野雅夫運転士の殉職事故だと言えます。

われわれは平野君の死を絶対に無にすることなく、さらに教訓化し、切迫化した「国鉄20万人体制粉碎、運転保安確立、三里塚二期着工阻止、軍事大国化・改憲阻止、中曽根内閣打倒」へ向け闘っていかねばなりません。

また、国鉄当局は「59・2」における二四五〇〇人の余剰人員を背景に、6月には余剰人員調整策についての考えを明らかにし、7月には退職、休職、派遣のいわゆる首切り「三本柱」を提案してきました。そして「60・3ダイ改」は、効率化を図ると称し過去の「ダイヤ改正」と

は全く異質とした要員生み出しをもつて首切り「三本柱」の活用による「分割・民営化」を押し進めてきたといえます。

これらの経過を振り返る時、あらゆる攻撃が一連の関係をもつてかけられていることです。

その根源は、ワッペン、名札等の攻撃から始まっているといえます。

日常の職場生産点における闘いの重要性を認識し、職場抵抗闘争をさらに充実しなければなりません。

## 『330』を忘れないぞ！



臨調合理化攻撃は遂に平野君のかけがえのない生命を奪った。悲しみを怒りにかえて、運転保安闘争の新たな再構築を



全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！